

高校生

との対話

卒業生が久しぶりに学校を訪ねてきたときに、「先生が話していたことはよく覚えています」などと言われると、本当に教師冥利に尽きるなあと、うれしく思うのです。でも、このリレー連載の原稿を書こうと机に向かってみると、私のほうも、これまでに出会ったたくさんの方の生徒たちのことを思い出します。

本当に教師という仕事は、誰かの記憶に残ったり、誰かを記憶したりする仕事なんだな、そうやってお互いの人生の一部になっていく仕事なんだなと、改めてその尊さと重大さを感じます。

そして実際、彼らとの記憶が、私の教

教職人生の糧となった
A子との記憶

大阪府教育センター
附属高等学校指導教諭

池田 径

いけだ けい 教えることと教えられることは一体ではありませんが、生徒に教えることよりも生徒に教えてもらうことのほうが多い教職人生です。

職人生の大切な糧となっています。たとえそれが、苦い記憶であっても。

生徒に寄り添う教師に

私は大学に一三年間（！）通い、現代の青年の特質について社会学の立場で研

究していましたが、あることをきっかけに、「若者について語る研究者」ではなく、「若者に向かって語りかける教育者」になろうと決意し、高校の教育現場に飛び込みました。

そして、「生徒に寄り添うこと」をモットーに教育活動を行いました。最初の勤務校では生徒たちと良好な関係を築くことができ、この仕事は天職だと感じました。課題を抱えた生徒が多い二校目の学校に転勤し、即一年生の担任となったときも、それまでどおり、「親身になって寄り添って」という姿勢で行けばうまくいくと信じていました。

A子との出会い

そんなときに出会ったのが、A子でした。A子は、地元の中学校でいわゆる番長だった生徒で、中学校からの申し送りでは本人だけでなく保護者も要注意とされている人物でした。

クラスには他にも出身中学でそれなりの武勇伝を残してきた生徒たちがいて、

クラス開き初日からマウンティングは始まっていました。A子は、特に手出しはしていないのに、その存在感であつという間にトップに君臨しました。

私は担任として、このクラスのキーパーソンはA子に間違いないと考え、彼女へのアプローチの仕方を思案していましたが、その機会は早々にやってきました。

その学校では四月中に担任がクラスの生徒全員と一対一で面談することになっていました。しかし私は、そういう「正式な個人面談」だけではなかなか関係性を築くことは難しいと考え、教室の掃除当番を班ではなく個人に割り当てて、生徒一人一人と順番に掃除をしながら何気ない会話をし、関係性をつくるきっかけにしてみました。それで名簿の順で初めのほうになるA子と話をする機会がすぐに来たのです。

私はそのときまでに、中学校ではA子と話ができる教師が一人いたので、その教師が三年間、A子の担任を引き受け、卒業まであらゆる面倒を見たという情報を得ていました。

「高校生活が始まったわけだけど、今のクラスはどう？」

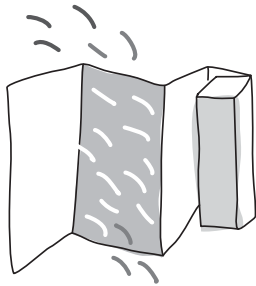
「いろんな奴がおるからおもしろいわ」

「そうか。授業も真面目に聞いてくれるなど感じるけど」

「先生の授業はわかりやすいからな」

「ありがとう。A子の中学には、信頼できるすごく良い先生がいたって聞いてるよ。その先生みたいになれるように頑張るから、よろしくね」

私は、A子とのファーストコンタクトに成功したと感じていました。でも、次の日から、A子の私に対する態度はがらりと変わってしまったのです。



荒れるA子のそのわけは

A子は私が話しかけても無視するようになり、授業も妨害するようになりました。しかも、自分自身では何もせず、何人かの男子生徒を立ち歩かせるなどして授業秩序を乱すので、やりにくくて仕方がありません。彼女が私の言うことを聞かなくなると、それに同調する生徒たちも現れ、クラスから落ち着きが失われていきました。

私はとまどい、焦り、何が気に食わないのかをA子に尋ねるのですが、まったく取り付く島がありません。私は困り果ててしまいました。

幸い、そのときの副担任の先生は初任の若い女性の方で、日頃から担任と生徒の間に絶妙な距離感で入り、さりげなくフォローをしてくれる人でした。私はその先生にすぐるしかないと思い、A子がなぜ私を拒絶するのか、探ってもらおうにお願いしました。

それから数日後、副担任の先生は、A

子から聞いた話として次のようなことを教えてくれたのです

「A子は、以前一緒に掃除をしたときに、中学のときにA子の面倒を見ていた先生みたくになるからと言われたことが、気に食わないみたいです」

「その先生みたくに、私も寄り添っていくからということが、気に食わない？」

「A子の言葉を借りると、『お前に何がわかるねん。その先生みたくになるとか簡単に言うな！』ということになるようです」

私は二重の衝撃を受けました。まず、「親身になって、寄り添って」という姿勢が通用しない場合があることにショックを受けましたが、さらに、その姿勢自体が、実は傲慢でありうることに気づかされたからです。

A子にとって、中学校のその先生との関係は、私などには計り知れないくらい特別で、大事なものでした。それに自分が必要とされるというのは、傲慢以外の何物でもありません。また、そこには、自分自身として彼女に向き合うことを避

け、自分以外の者の力に仮託しようとする自己保身が見え隠れしています。

別件で生活指導を受けた際に、「大人は話をつくりよる！」

と叫んだA子は、そういう大人の狡さにとっても敏感な、つまりそういう大人の狡さに何度も傷ついてきた生徒だったので。

私にとってそれは「若者に向かって語りかける」どころか、そもそも語りかける資格があるのかどうか問われる出来事でした。

A子の記憶が残したもの

しかし、気づいたときにはすでに遅く、挽回しようと頑張っても、むしろ挽回しようと頑張れば頑張るほど、A子の荒れはエスカレートしていきました。私はノイローゼのような状態になり、やがて退職の二文字が頭に浮かぶようになった頃、A子は家庭の事情で突然退学することになりました。

手続きは郵送で肅々と進み、最後に退

学届が受理されたことを伝える手紙を送ったところ、初めてA子の保護者から私宛に電話がかかってきました。少し身構えて電話に出ると、保護者は手紙が届いたことと、これまでのお礼を述べられた後、

「先生もいろいろ大変だと思うけど、頑張ってたな」

と言って電話を切られました。

A子は保護者に私のことを悪くは言っていないかったようでした。彼女はまったく話をつくらず、自己保身もしていませんでした。

結局、私は教師を辞めず、生徒たちに寄り添う教育活動を続けています。しかし、A子との出会いの後、私は寄り添うということの意味を、自分自身に深く問うようになりました。

彼女との記憶が、教師としての私の一部となり、生徒たちへの向き合い方に影響を与えています。彼女自身に返せなかったものを、目の前にいる生徒たちに返し、今日もまた、彼ら／彼女らの人生の記憶と交わる日々を送っています。